

磯根資源を活用した青壮年部の取り組み

相馬双葉漁業協同組合請戸支所青壮年部

鎌田 寛典

1. 地域及び漁業の概要

相馬双葉漁業協同組合請戸支所は、福島県沿岸の中央部に位置しており双葉地方の漁業の中心となっている。請戸支所の正組合員は158名、准組合員70名で、主な漁業は固定式刺網、機船船曳網となっている。平成18年の水揚げ数量は1,661トン、金額で6億8,300万円であった。

請戸は古くから漁業が盛んで、そのため漁船による出初式や安波祭など漁業にまつわる伝統文化を受け継いでいる地域である。また、請戸支所では町と協力して、平成12年度から請戸夕市の取り組みを行っている。6月から12月までの毎月第3土曜日に開催しているが、毎回大勢の客で賑わい、地元の夕市として定着している。

2. 研究グループの組織と運営

我々請戸支所青壮年部の部員は部長以下21名で、漁青連への参加、研修などの活動を行なっている。特に安波祭への参加は、地元につながる伝統行事を引き継ぎ、次の世代へ伝える重要な活動の一つである。

3. 活動課題選定の動機

我々青壮年部は、平成10年度から磯根資源増大と環境保全等を目標に藻場造成などの活動に取り組み始めた。その中で、県の補助事業である後継者グループ活動支援事業などを利用して請戸海域の藻場調査、部員の潜水資格の取得などの活動を行った。その後、青壮年部員単独の調査体制が必要と判断されたことから、平成14年度からは活動海域を漁港周辺に移動して磯根資源調査に取り組んだ。それと共にアワビの種苗放流も開始したことから、放流後のアワビの成長量把握や、放流効果の算出が求められている。

4. 実践活動の状況及び効果

(1) 放流種苗追跡調査

平成16年度に福島県栽培漁業協会からアワビ種苗2,000個体を購入し、初めて漁場に放流した。以降、毎年種苗の放流を続けている。

放流翌年の平成17年度からは放流種苗の成長を調査するために、特別採捕許可を取得し、小型のアワビを中心に採捕、測定を行った。追跡調査の結果、放流した種苗の成長が確認されたが、特に平成18年度の調査では透明度などの条件が良かったこともあり87個体の小型アワビを採捕することができた。採捕したアワビは天然と人工を判別したうえで、人工種苗については放流時のおよその殻長と採捕時の殻長、重量を測定し、更に貝殻の年輪から放流後の年数を推定することで放流種苗の成長を推定した。その結果、年間の平均

成長量は約 15mm となったが、成長の良いものでは 20mm 以上成長した個体もいたことがわかった。この成長量は非常に良好な成長であることから、港湾周辺の漁場でもアワビ漁場として十分活用できる見通しが得られた。

平成 19 年は本業の機船船曳網が好漁だったことや港湾工事の影響で思うような調査活動ができなかったが、それでも操業の合間に調査を行い、少ないながらも 17 個体のアワビを採捕した。測定の結果、放流種苗の順調な成長が確認された。

生成 16 年放流種苗が本格的に漁獲加入する本年以降は、回収率の調査を行い、放流効果を算出する計画である。

(2)流通販売試験

漁場で潜水調査を行った結果、この海域にも天然のアワビやウニが生息することが分かった。藻場を保護し、アワビ資源を有効活用するためにはウニの駆除が必要になることから、磯根資源の需要調査も兼ねて、定期的で開催されている請戸夕市に出店して採捕したアワビやウニを試験販売することとした。

平成 16 年度から販売試験を開始したが、毎回好評で、お客さんからは「請戸でもウニやアワビが捕れるのか」と驚かれることもあった。昨年は放流種苗も販売対象の大きさに成長してきており、夕市で販売することが出来たことから、放流種苗が本格的に漁獲加入する今年以降の漁獲が期待される。

(3)餌料環境整備

我々の活動の中で重要な活動の一つがコンブの養殖である。港内に延縄式施設を設置しコンブを養殖する取り組みだが、収穫したコンブは栽培協会に出荷し、我々が購入するアワビ種苗の餌として利用される。これにより、県が推進する栽培漁業にも協力できるのではないかと考えている。

5. 波及効果

磯根資源の需要調査のために請戸夕市でウニ、アワビの販売を行ったところ、たちまち売切れとなってしまい客から苦情が来ることが多くなった。試験的に、自分たちが獲ってきた魚も並べたところ予想以上に好評で、こちらもすぐに売り切れてしまった。そこで、一部の部員が夕市での鮮魚販売に取り組むこととなった。販売にあたり、どのような魚を販売すれば良いのか考えたのだが、安くて美味しい魚を多くの消費者に買ってもらえば水産物の消費拡大にもつながるのではないかと考え、ドンコやカスベなど、市場では値段が出ない雑魚を販売することにした。

実際に販売したところ値段の安さもあり好評で、安い魚でもおいしいということを消費者に知ってもらうことで魚食普及、消費拡大に貢献したと感じた。また、自分たちが獲ってくる雑魚でも十分活用できることが分かったのは大きな収穫であった。

6. 今後の課題や計画と問題点

一昨年秋の低気圧により漁場の藻場が被害を受けた。藻場は未だに回復しておらず、早期の回復を願っている。藻場回復のためにアラムの種糸を購入して養殖試験を行ったが、成長が確認できなかった。しかし、コンブ養殖施設にアラムが付着し成長していたことから、アラム天然採苗の可能性も示唆された。さらに、養殖するコンブの一部を漁場のアワ

ビに給餌するなど、漁場環境改善への取り組みが重要な課題となる。

また、鮮魚販売の取り組みは始めたばかりであり、まだまだ軌道に乗っているとは言えないが、食育が重要視されている現在、安くて美味しい魚を提供して、子供達をはじめ多くの人に魚の美味しさを伝えることが重要な課題となってくると感じている。

今後はアワビ放流種苗の再捕率などについて調査を行い、磯根資源を活用すると共に、魚食普及や鮮魚販売等の新たな活動に積極的に取り組むことで、充実した青壮年部活動となるよう努力していきたい。



図1 請戸の位置



図2 潜水調査の様子



図3 種苗の成長

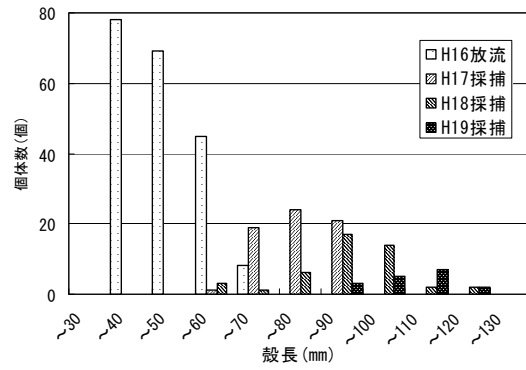


図4 追跡調査結果



図5 ウニ、アワビの夕市販売



図6 鮮魚販売の取り組み